

## 書評 新刊 紹介



横浜康継・野田三千代 共著

海藻おしば カラーな色彩の謎

94pp., (オールカラー印刷), 海遊舎 2,800円

海そして海藻をこよなく愛し、専門の海藻の光合成の研究の合間に美しい海藻おしば標本を作り続けてきた著者(横浜さん)が、この度は一緒におしば作りに魅せられてきたグラフィックデザイナー(野田さん)の協力を得て、共著でさらに美しい本を出版した。見て楽しい読んで分かりやすい、子供から大人そして専門家まで海藻の魅力と大切さを理解できる参考書になり、図鑑にもなる美しい本といえる。

まず、我々日本人にとって食卓で馴染みの深い海藻の紹介とそのカラフルな色彩の謎解きから始まる。海の干潮の仕組みと干潮時における海底探索の仕方、帯状分布や潮だまりの観察など、学生実習のときのよい参考にもなるが、そこに生育する一つ一つの種についても著者の優しくそして光合成研究者の厳しい観察の目が光る。また、それぞれの種類の形態について日常生活に使われる日用品や道具などに例えて説明をしているので、海藻を全く知らない人でもその形状を想像し海底の世界に引き込まれていく気分になる。そして美しい海藻おしばのカラー写真を十分に堪能させてから、それら海藻が何故様々な色彩を持っているのか、

紅藻・褐藻・緑藻のそれぞれについて、それらの色素と海中の光(質)そして光合成との関係を分かりやすく説明する。また、海藻が我々日本人にとって万葉の時代から親しまれてきたことについて、なりの花や海松色については、確かに古代の人々の方が自然の観察力に優れていたのではないかと、今一度我々に自然を慈しみ眺める余裕と持つべきではないかを考えさせる。

地球そして生命の誕生と藻類の関わり、大気圏における酸素とオゾン層の成因及び二酸化炭素の行方、地球温暖化と人類の破壊活動については、著者の持論として本を書く毎に警鐘を鳴らし続けてきたことであるが、掛け替えのない地球をどう守るべきかを提起する。利便性・経済性のみを追求して他を顧みない現代の人間社会に対して、研究者が共に警告し環境破壊からわが地球船を守る努力が今本当に必要であることを痛感させられる。

最後に、楽しい海藻のおしば作りの実際についてイラスト入りで丁寧に説明し、年賀状やクリスマスカードの作り方まで示されているが、それも子供の時から海辺での採集や標本作りを通して、46億年の地球の歴史に関心をもち理解していくことにも繋がると思う。

繰り返しになるが、とにかく、見て美しい読んで楽しく分かりやすい、海藻についての参考書になり図鑑にもなる。そして藻類・植物の光合成を通してのわれら地球の環境保全のための啓蒙書でもある。それぞれの書棚に学校の図書室に必ず置いておきたい一冊である。

館脇正和(北海道大学理学部附属海藻研究施設)

Abbott, I. A. (Ed.): Taxonomy of Economic Seaweeds. With reference to some Pacific species. Vol. V. xx + 254pp. California Sea Grant College, University of California, 9500 Gilman Drive, La Jolla, California 92093-0232. 1995. \$10.00

1993年7月にハワイ大学で行われた「第5回有用海藻の分類に関する国際ワークショップ」の成果をまとめた論文集である。今回のワークショップには日本、アメリカ合衆国、中国、韓国、ベトナム、フィリピン、マレーシア、タイ、フィジー、チリから22名が参加した。内容は、ホンダワラ属、テングサ属、オゴノリ属、

キリンサイ属の4つの節に分かれており、それぞれに分類上重要な記載、指摘がされている。ホンダワラ属では、日本に産する section *Zygocarpicae* 10種の詳細な記載と検索表が書かれている。また、section *Acanthocarpicae* で subsection と series を設ける試みがされている。テングサ属では、韓国産テングサ目8種4変種の検索表とノートが書かれている。オゴノリ属では、4新種、1新変種が記載されている。また、オゴノリ属97種のリストが最近10年間の文献付きでまとめられている。キリンサイ属の節では、ベータカラギーナンをもつ *Betaphycus philippinensis* が新属新種として記載され、2種がこの属と新組み合わせられている。

最後になったが、本書は参加者の一人で1994年に亡くなられた C. F. Chang 教授に捧げられている。

小亀一弘(北大・理・生物科学)